

詩誌
極微

vol.3

佐野 豊
小田原 慎治
篠田 翔平
森田 直

TAKE
FREE

瘡

詩誌 極微

Vol.3

瘡

お父さん

背骨

推理

密偵

みつめ

ナツヤスミ

東京タワー

お父さん

ぼくは十歳のとき

九歳の子供をいじめていた

通学バスで

わざと彼の隣の席に

座って

頬をつねったり

太ももをつねったり

していた

彼が泣くのが

楽しかったのだ

ある日

学校前バス停に降りると

大きな男の人が立っていて

いきなり

ぼくの右の耳たぶを指でつまんで

ちぎりとり

立ち去った

その人の顔はそのとき

真っ黒で

表情がわからなかった

あの人は

ぼくのお父さんではないが

お父さんというものは

あれでいいと今は思う

彼には耳たぶを

預けてある

背骨

嫌な仕事を

片付けるたび

上体をグッと反り返し

ボキボキッと背骨を鳴らす

瞬間 背中は暖まり

頭の中は心地よく泡立つ

その代わり背骨の両端が

こどことく欠けてしまう

帰ってシャワーを浴びる時
むりやり指を差し入れて
かけらをボロボロほじるのが
日課になりつつある

石けん置き一杯分溜まると
ジップロックに入れて

整形外科の無人回収ボックスへ

同じ重さだけ

カルシウムの錠剤が

取り出し口からボトリと

処方される

医者のお墨付きの

無責任を知りつつ

今日からは

指の付け根も鳴らしはじめ

推理

筆跡によるあどけない

可塑の余地のうえを

凶々しいほど実直にきてしまうことに

なんの躊躇いもない

裏付けの

あたかも認められるパイプを啜え

ニヒルな笑いと

泣き落とし

悲劇は続き物だった

モルグ街からきたはずの

おかしみと単純

そう思ってみれば明日は我が身

また迷宮に出入りする坊

そして誰もと平気にいるのは

アルセーヌやエルキュールの

マナーにそぐわない

果たして

時効が成立してるのかどうか

確かめるすべなく

未だシャーロックのなかまたちと

戯れているだけのようでせつない

密偵

うかつだった

はぐれ蟻を踏んだのだ

あつ と叫ばれる間もなかったので

さいわい居場所は

われなかった

この倉庫では

くせものが

隠れたまま干からびていく

それを見届けはするが

密偵は

何もしないしかない

黙って こうして

身を潜めていると ほら

忘れそうだ

人体は破壊できること

ぴすとるはすぐ錆びること

打ち明けない夢のこと

だからここでは

しずかな声で

話をしよう

みつめ

誘い合う目と目

生きてる目と聴かされる耳

そんな場所が故郷だった

口火を切る者みな

見つめ続ける僕だ

痕跡に触れる手

あらゆる器官が存在をまさぐり

どんな部位に立ち止まったとしても

確かめ合う切なさで

幽体離脱も

ドツペルゲンガーも

あてにならなかつた

頼りない腹話術師こそ人形の

二重構造をかませるひとよ

誘い合う目と目にたち戻り

我が急所いかなる場合にも

目にありと言い切れるか

僕は生きてる

見るといふ面白さに歯を砕き

くびをかしげて

ナツヤスミ

読めそうで読めない夏の地図を眺めている

桃色のゆびから桃色のゆびへ

手渡された起伏は、夜の葉音のように広がっていく。「こゝ、覚えてるっ」

風景の中で、忘れそこねた記憶の下腹部は盛り上がり

ゆたかな毛を吐きだすだろう。月に、陽に、いくえにもかさなるこどもの眼で

日々はその端をゆっくりと持ち上げる。(のぞいてこらん)

毛布の向こうから、名前だけが残ってしまったこどもが

のびすぎた前髪の奥で蛍を放つ。「切らないと、どんどんのびて

失明するって——」薄くはばまれた夏時間の底で

カーテンの中だけが安全地帯。そこからでたら、鬼は

血を流したわたしの、その傷口の内側へ

おおきすぎる眼で涙をいっぱいに注ぎ込む。いたくても、いたくても、

見つかつてしまった布団の中で、真つ赤な火は灯されるだろう、そこから

つながれたこどもたちの傷口、途切れながらはこぼれる

大量の架空の地名がわたしたちの声を消していく。気持ちよくて

足をいっぱい伸ばすと、ふれあってしまう木々の内部で

育ったとうめいの芯がゆっくりと押し込まれる。

(あたま、わるくなってしまうんだよ。) 地図に委ねられた記憶の中で

わたしたちは何度も死ぬ。ころしあい、くびをしめ、さまざまな血をあびながら

濡れたプール道具一式、アスファルトに引きずって

遠い道のりを帰る夕ぐれ(ほんとうに、

ただ一度。)

息が、夏のまま。

東京タワー

夜だ

東京の真ん中

真っ赤になってとろけだす塔を見た
金のない

神宮球場の帰り道

この日横浜は卑猥な試合をやった

打者はバットをしならせて

投手は腰をくねらせて

スコアボードはべっとり湿り

ものほしそうに黄ばんでいた

野次がのど元に絡まって

信じられない音がした

ビールを何杯も流し込む

すっからかんになった夜

冷たくなった体を引きずり

信濃町、歩道橋の上

とろけだしながら街に沈んでいく

真っ赤な身体の塔を見た

琥珀色でジェルを広げて

赤坂、青山、六本木を

さまざまな運命から冷たくなってしまった人間たちを
包み込んで焼いていくのを見た

塔もろともに燃えあがりながら

奥から熱くなっていく胃袋を心地よく感じながら

泣きながら

ゲロ吐いた

「推理」「みつめ」 佐野 豊 (さの・ゆたか)

「お父さん」「密偵」 小田原慎治 (おだわら・しんじ)

「ナツヤスミ」 篠田翔平 (しのだ・しょうへい)

「背骨」「東京タワー」 森田 直 (もりた・なお)

編集後記

記憶のなかを思う存分掘り出したら、どんな意外なものが出てくるだろう。詩を書いていると、普段はとっくに忘れてしまっている記憶に触れていることがある。ときにそれが痼だとも知らずに。詩を書いてしまう人間にとっての痼とはなんだろう。深刻な顔で、やまいだれに、かたいか、と呟く。3号より小田原慎治が極微に加わった。四人となった極微をどうぞよろしくお願いします。(佐野)

し し きょくび しこり
詩誌 極微 vol.3 「痼」

発行人——佐野 豊

発行所——佐野書房

発行日——2019年6月22日

ご意見・ご感想

ご意見・ご感想をお待ちしております。四人にとって、何よりの励みになります。以下のメールアドレスか、右のQRコードから送れます。

shishi.kyokubi@gmail.com



バックナンバー

ホームページにバックナンバーをPDFで公開しています。

<https://shishi-kyokubi.jimdofree.com/>



桜桃の大木は、琥珀色の樹脂を大粒の宝石みたい
に吹き出して、おもむろにたぎっていた。

表紙の文

Thomas Wolfe(1929). Look Homeward, Angel.

トマス・ウルフ 大沢 衛=訳 (1955).

天使よ故郷を見よ 上 (講談社文芸文庫) より引用